

わたしのオブザーベーションズ(Ⅱ)

ー幼児教育、日本留学報告ー



マリヤ・リー・ベナビデス

適応、言語、自発性、創造性などについて

私たちが、これまで人生の大部分を一緒に過ごしてきた祖国、家族、友人、仕事を遠く離れた土地へ私たちを運ぶ乗物を前にする時、私たちにただ一つわかっている事は、さまざまな想いと期待を胸にこれから未知の国に向かって行くのだという事だけです。

日本の幼稚園における教育方法・技術を視察し、習得するために、メキシコ政府が、私に許可した留学についての私の個人的体験に関して、お話ししたいと思います。私は、メキシコ市にある幼稚園で八年間働いていた教師です。

六ヵ月前に国を出て、東京に直行しました。なぜ、

日本を選んだかと申しますと、まず第一に、私にとって幼稚園教育 (Education Prescolan) が非常に重要な意味を持っているという事と、第二には、日本という国が、古い物と新しい物、東洋的なものと西洋的なものとを組み合わせ、伝統的な習慣を保持しながらも、同時に進歩のもたらす革新を容易に受け入れる事ができた国であるからです。ここ東京で私は、新しい人々、

生活、時間、食物、気候等、全く新しい事づくめの中で生活を始めたわけです。着いてすぐに、視察のための活動を始め、いろいろな授業を受け始めた時にも、最初の三ヵ月は、先に述べましたいろいろな点で適応していくためについやされたと言えます。外国に学ぶ人は、誰でも、周囲のふん囲気に慣れるのに、ある程

度の期間を必要とすると思います。この事は非常に重要な点で、出来るだけ短かい期間で慣れるようにすべきだと思います。つまり時間の大半を私たちのおもな目的に費やす事ができるようにです。

私たちが、環境に適応していく過程で、習慣種族の相違、更には、哲学的、宗教的思想の相違でさえ、人間関係に与つての障害にはならないという事が、しだいにわかるようになります。大切なのは、各個人の行為です。そして、この個人の行為は、私たちの価値観や判断を広め、偏見から自由にします。そしてまたおそらくは、より公正な見方ができるようになります。

いったい、何と何が、私たちの失敗した点であつたのかを、距離をおいて眺める時には、あやまちというもの、よりはつきりしてくるものです。そうするのは、あやまちを嘆くためではなく、私たちの将来の行為を改善し、私的かつ職業的な生活を改善するためなのです。困難ではありますが必要な変化を通じて、私たちが、これまで慣れていたさまざまな因襲を克服し、学ぶ事而努力を通じて、順応的態度を変えていくのです。こうした努力が少しずつ私たちの日常生活の一部となり、知らないうちに、毎日、何かを学ぶのです。

それは、一つの言葉、一つの経験だろうし、時には、大して重要でない事であるかもしれないし、または、非常に重要な事かもしれないけど、常に何か新しい事を学ぶのです。学び知つた事のすべてが、私たちの内面に、太陽の光線のように入りこみ、私たちの周囲の人々への熱に、つまり何か有用なものに、変わつて発散されるのです。仕事については、新しく学んだ技術方法を私たちの国にもち帰ると共に、私たちの受け入れ国に何かを残していけると、私は確信しています。どんな人でも必ず、生きている限り、何か貴重なものをもっているはずなのですから。

各国の政府は、地球上のあらゆる国民の友情と平和を希望すると言います。国民というのは、各個人からなるものであり、各自の出身国が、こうした事を希望しているという事を示し、自分の生まれた祖国への民族主義的感情からではなく、威厳をもって国を代表するのは、各個人の責任であると、私は考えます。というのは、私たちが、家族に対してと同様、祖国に対していただいている愛情は、破壊的なところのない刺激剤であるからです。

適応能力と轉換能力は、人々が適応しようとする欲

求の程度にかかっているものです。いいかえれば、ある人が適応しようと本当に望めば、出来るものです。なぜなら、それは上塗りの作業だからです。つまり、私たちの古い習慣、慣習の上から、私たちが必要とする新しいものを重ね塗りするわけです。

私が今回、奨学生になる以前には、今まで一緒に暮らしてきた家族という集団は、一部には、私がそれを必要とみなしていたゆえに大切なものであり、愛すべきものでありました。しかし、家族という核の外で暮らしていけるだけの能力が私たちにあるのだという事に気づく時、家族への愛は、単なる生活共同体というわくを越えて、よりいっそう純粹で、誠実なものに変わるのだと考えます。あらゆる人が、自らの力と、自らの限界を知り、確固とした人格をもって、社会の一員となり、単に快適ではあるけれども、あまり実りのない共同生活に、私たち自身を閉じこめてしまうのではなく、社会集団に有用な成果を貢献する事が、非常に重要な事だと思えます。

学生一人一人が、克服すべき問題は種々さまざまあると思いますが、私の場合には、そしてこれは皆に最も共通している問題だと思えますが、経済問題、健康

状態と共に、時に感じられる悲しみ、ノスタルジー、あるいは孤独感といったものでした。解決を要するさ細な問題に出くわさないという事は考えられませんが、それも勉強の一部であり、私たちの環境への適応をより確固たるものにしてくれます。これから行こうとする国に関する本を読んで知識を得る事は、誰にしろ助けになる事は、言うまでもありません。そうすれば異和感をいなく事も少なくなります。なにしろ、衣食や氣候に関する日常生活の細かい点や、私たち皆が知っている一般的な知識以上に、広く歴史や言語を学ぶという事は、全くむずかしい事なのですから。

言葉の違いというものは、意志の疎通に際して、問題になるとは思いません。言葉は違うけれども、理解したいという共通の気持でいけば、さまざまな意志表示の手段を使うという事で充分です。その手段のおもなものとして、身振りで表現するという事があります。これは、広くて豊かな言葉です。子どもたちがあれだけ使っているながら、私たちおとなは、少しずつ失いつつある表現でもあります。これを機会に、私たちの体、目、顔、手を再び用いて、他の人々を理解する事

を、学びなおそうではありませんか。

自発性というのも、人間を知るうえで、非常に重要な手段ですが、これもまた、あまりに用いられる事がないので、受け入れられないのではなからうかというおそれから、頭で先に判断をしまつて自然な瞬間というものを台無しにしてしまうのです。

自発生は、よく心理劇や心理テスト等に用いられませんが、これをわれわれの日常生活においても、誠実に、そして理解されないのではなからうかというおそれを



周郷先生と一緒に

もたずに使ってみようではありませんか。この最後の判断は、私たちの周囲の人々にあてはまり、私たちの人格の不可解な部分を読みとるのに時間をつぶさないようにするためにいい方法です。

Schala Shipを与えよう。一つの刺激は、創造欲を刺激するという事だと思えます。創造力は、人間の生活の一部をなし、他の生物と人間とを区別するものですが、多くの人間は創造する事を忘れつつあります。二度と目覚める事のない夢におちいる事のないように、日々に養っていかねばならないものです。

学習し、観察し、楽しむための時間が限られている事を知っている時には、私たちの力と欲求を毎日刺激し、その内部に創造力を再生するものですが、一番大切な事は、この間に私たちが学びとった事が、わが国に戻った時に、消え去ってしまわないようにする事ではなく、その反対に有用でないものは切り捨て、最初のうちは思想と慣習の上塗りだったものを、いっそう確実に、私たちの人格そのものの中にとり入れていく事です。帰国のあかつきには、肉体的な相違は、皆同じ人間であるという現実の前に消滅してしまうという確信を持ち帰る事と思えます。(四二七、一九七二)